

I

總論

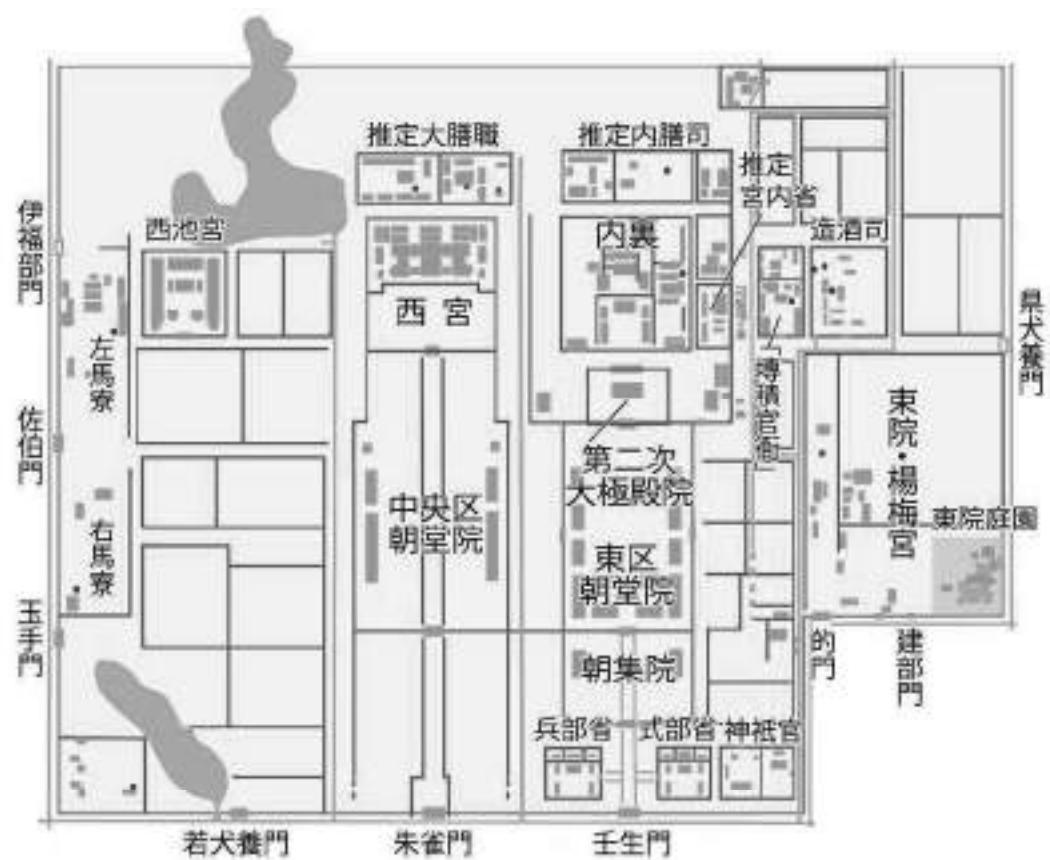
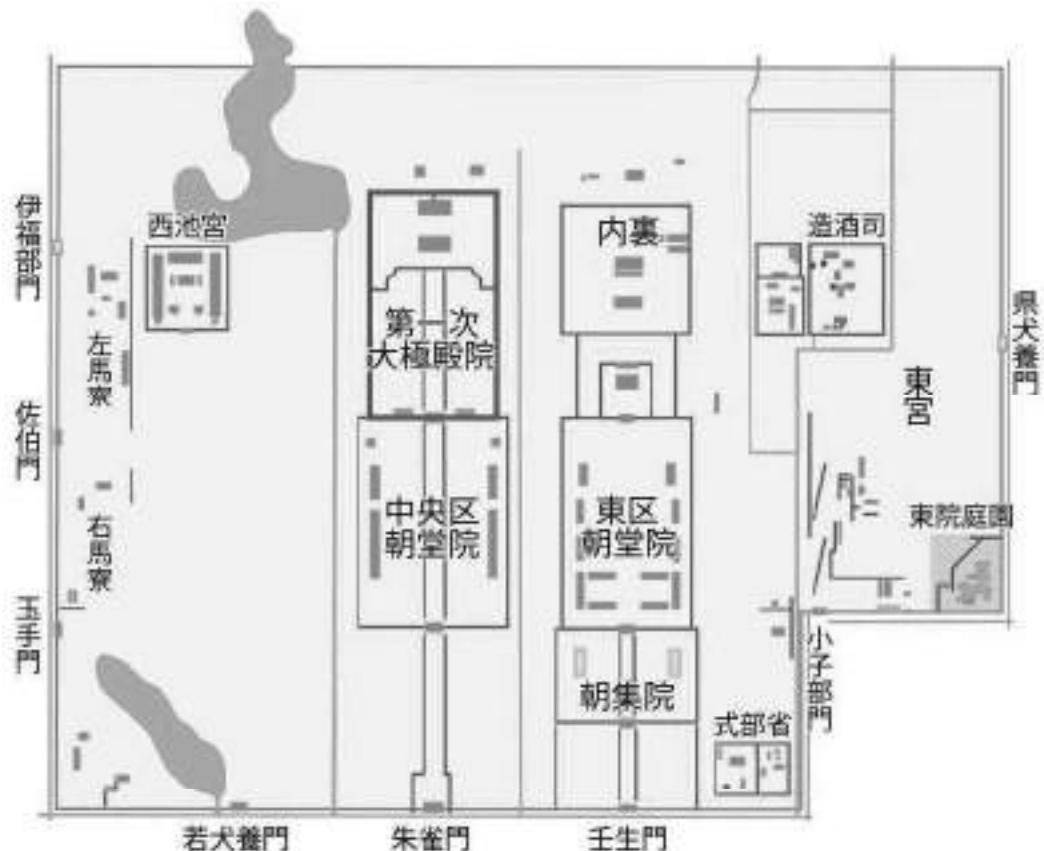


図1 奈良時代前半（上）と奈良時代後半（下）の平城宮

本書は、科学研究費補助金による研究の一環として作成する報告書である。

【研究の概要】

a 研究課題及び課題番号

平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化
(課題番号 18H03597)

b 研究期間・種目

2018（平成30）年度から2021（令和3）年度まで
科学研究費補助金 基盤研究（A）

c 研究組織（所属は2021年度のデータによる）

研究代表者：渡辺 晃宏（独立行政法人国立文化財機構・奈良文化財研究所・都城
発掘調査部・客員研究員、奈良大学・文学部・教授）
研究分担者：中川 正樹（東京農工大学・工学（系）研究科（研究院）・名誉教授）
研究分担者：末代 誠仁（桜美林大学・リベラルアーツ学群・准教授）
研究分担者：金田 明大（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・埋蔵文
化財センター・センター長）
研究分担者：高田 祐一（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調
整部・研究員）
研究分担者：小口 雅史（法政大学・文学部・教授）
研究分担者：北村 優季（青山学院大学・文学部・教授）
研究分担者：井 上 聰（東京大学・史料編纂所・准教授）
研究分担者：李 成 市（早稲田大学・文学学術院・教授）
研究分担者：角谷 常子（奈良大学・文学部・教授）
研究分担者：白井啓一郎（信州大学・学術研究院工学系・准教授）
研究分担者：鈴木 智大（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発
掘調査部・研究員。2018年度まで）
研究分担者：前 川 歩（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発
掘調査部・主任研究員。2019年度から）
研究分担者：馬 場 基（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発
掘調査部・平城史料研究室長）
研究分担者：山 本 崇（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発
掘調査部・藤原史料研究室長）

d 研究経費

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	総 計
直接経費	7,300,000	9,000,000	9,700,000	7,600,000	33,600,000
間接経費	2,190,000	2,700,000	2,910,000	2,280,000	10,080,000
合 計	9,490,000	11,700,000	12,610,000	9,880,000	43,680,000

【研究の目的】

文字画像データベース「木簡字典」と木簡・くずし字解読システム「MOJIZO」の開発・公開を中心とする、これまで15年間にわたる木簡情報集約の成果に基づいて、日本最大の木簡包蔵地である平城宮跡・平城京跡の発掘情報、文献資料、地理情報を資源化を行う。平城宮・平城京跡出土木簡の歴史環境を、総合的、有機的に理解できるようにすることで、律令制の申し子として日本木簡が8世紀に隆盛を迎えた理由を解明する。

また、韓国・中国木簡との実質的な比較検討が可能なプラットフォームを、両国の木簡（簡牘）に関わる拠点的な調査研究機関との共同研究の蓄積に基づいて、データベース連携などの形で構築する。これをまずは平城宮・平城京跡出土木簡をベースに実現し、東アジアの漢字文化圏を広く捉える視点に立つ木簡研究、いわば東アジア木簡学の構築に資する共有資源として、平城宮跡・平城京跡を中心とする日本の木簡を広く利用できるようにする。

【研究の成果】

2018年度

A、平城宮・平城京出土木簡の歴史環境の資源化

(1) 発掘調査成果（遺構、及び共伴した遺物）を木簡データベース「木簡庫」（以下、「木簡庫」）にリンクさせるためのシステムの検討。リンクを貼るのに用いる発掘調査地区割図と遺構図の現況について精査した。測地系の変更などに伴う地区割変更の処理については当面大きな支障は起きないとの見通しを得、システム構築の方向性を定めることができた。

(2) 『平城宮編年史料集成(稿)』の確認・増補のための資料収集作業を継続して行った。

(3) 『平城宮編年史料集成(稿)』作成に向けた準備作業を行った。

(4) 平城宮・京跡の発掘情報を集約するための枠組みづくりにむけ、各遺物の情報管理状況を確認し、それらのまとめ方について検討した。

(5) 「木簡庫」の研究文献目録拡充のための論文リスト作成作業を継続して実施した。合わせて、平城宮・京に関する研究文献目録の収集に着手した。

(6) 平城宮・京跡出土木簡のカラー撮影を約300点の木簡について実施した。

(7) 当初の計画には挙げていなかったが、平城宮・京の発掘調査成果に基づく平城宮3Dデータの製作を試みた。地図など2次元のデータだけでなく、3次元データとのリンクを貼ることでよりビジュアルに歴史環境を実感することができるようになると思われる。

B、平城宮・平城京出土木簡のグローバル資源化

(1) 海外の機関との間では、奈文研として共同研究を進めている国立伽耶文化財研究所・国立扶余文化財研究所を訪問し、出土木簡の調査を行うとともに、奈文研の木簡研究とデジタルアーカイヴについて紹介し、今後の連携について協議した。

(2) 東アジア世界における木簡・簡牘との比較研究については、密な連携を図りつつ、個別に研究を進めた。

2019年度

A、平城宮・京出土木簡の歴史環境の資源化

(1) 地理情報を加味した発掘調査成果（遺構及び共伴遺物）を木簡データベース「木簡庫」（以下「木簡庫」）にリンクさせるシステムの開発 平城宮・京跡を対象に WebGIS システムのβ版を開発した（Heijo HeritageMap（仮称））。これは国

土地理院の 1/25000 地形図をベースに、平城宮跡部分に既発掘区と大・中・小地区のグリッドを表示した上で、小地区ごとに出土遺物を一覧できるシステムである。出土木簡を一覧表示し、かつ URL から「木簡庫」で木簡の詳細を確認できる。その結果、本科研最大の課題であるシステムの枠組み構築を終え、運用の見通しを付けることができた。ベースには、国土地理院の提供する各種地図を始め、空中写真も表示できる。今後実現予定の奈文研作成の奈良盆地 1/1000 地図の利用、各調査区の遺構図の表示と遺構からの検索のための準備作業も行った。

(2) 『平城宮編年史料集成(稿)』の確認
・増補のための資料収集、(3) 平城京関係史料の確認と綱文作成作業、(4) 平城宮・京跡の発掘情報集約のための機関内の調整、(5) 「木簡庫」の研究文献目録拡充のための論文リスト作成と、平城宮・京研究文献の収集、(6) 平城宮・京跡出土木簡のカラー・赤外線撮影(約 200 点)と「木簡庫」への搭載準備などを継続した。

B、平城宮、平城京出土木簡のグローバル資源化

(1) 2019 年 9 月に北京にて木簡・簡牘に関する国際シンポジウム(第 1 回日中韓簡牘国際論壇)を開催し、三国の研究者間で共通認識をもつ絶好の機会を得た。また、中国社会科学院歴史研究所、韓国国立文化財研究所と今後の連携について協議した。

(2) 木から紙への移行の経緯など、東アジア世界における木簡・簡牘を共通の俎上に乗せた比較検討の議論に供すべく、引き続き個別に研究を進めた。

2020 年度

A、平城宮・京出土木簡の歴史環境の資源化

(1) WEBGIS システム β 版(Heijo Heritagemap)の改良 第一に、奈文研の遺跡データベースに基づく全国規模の文化財情報検索システムと連携し、「全国文化財情報・古代都城 WEBGIS」として、より汎用性の高いシステムにヴァージョンアップした。全国規模の遺跡の地理情報とリンクさせることで、平城宮・京跡だけでなく、全国出土木簡の情報を表示できるようになった。当面は平城宮・京出土木簡のみを対象とするが、木簡以外の遺物も検索できるようにさらに改良を加え、全国規模の遺跡・遺物検索システムのプラットフォーム機能が期待できるものに仕上がった。第二は、木簡検索システムの結果表示方法の改良である。平城宮跡部分に既発掘区を表示し、遺跡名・地区名・木簡本文の語句・発掘調査次数をテキスト入力することで、小地区ごとに出土木簡を一覧できる。また、改良点として特記すべきは、上記のテキスト入力による検索に加え、地図上の任意の地点を範囲指定することで、そこから出土した木簡を検索できる、地図による木簡検索システムを開発したことである。これにより木簡のテキストデータと地図の双方向検索が可能になり、WEBGIS システムとしての利便性が一層高まった。

(2) 『平城宮編年史料集成(稿)』の増補のための資料収集、

(3) 平城京関係史料の資料収集と綱文作成作業などを、昨年度に引き続き継続して実施した。

B、平城宮、平城京出土木簡のグローバル資源化

(1) 海外機関との連携は、COVID-19 の感染拡大のもと、台湾中央研究院歴史語言研究所など奈文研を通じた限定的な交流にとどまった。

(2) 東アジア世界の木簡・簡牘の研究、

都城制研究を初め日本古代史研究と木簡の連携研究など、平城宮・京跡出土木簡のグローバル資料としての総合的検討の深化に寄与すべく、引き続き個別に研究を進めた。

2021年度

A、平城宮・京跡出土木簡の歴史環境の資源化

(1) 発掘調査成果（遺構、及び共伴遺物）を「木簡庫」にリンクさせるためのシステムとして、奈文研の全国文化財検索と連携して開発した WebGIS システム（Heijo Heritgemap）を、「文化財総覧 WebGIS」

（<https://heritagemap.nabunken.go.jp/>）としてリニューアル公開した。

木簡検索についての改良点は、1) 共伴遺物として、平城宮跡出土の墨書き土器を木簡とともに検索できるようにしたこと、2) 昨年度実現できなかった平城宮・京跡部分における奈文研作成の奈良盆地の 1/1000 地形図を追加したこと、3) これまで発掘調査の際に奈文研独自の座標系（平城座標）を用いていたため表示が困難だった 1989 年以前の発掘調査で出土した木簡・墨書き土器についても表示できるようにし、検索可能小地区は木簡・墨書き土器合わせて、これまでの 641 地区から 1558 地区となり、多くの遺物をカバーできるようになったこと、などが挙げられる。

これらの改良によって、将来的に木簡・墨書き土器以外のあらゆる遺物、及び遺構を含めた平城宮・京の発掘調査成果（遺物・遺構）の総合的なプラットフォーム構築の見通しを得ることができたと考える。文化財総覧 WebGIS で連携する全国文化財検索を通じて、平城宮・京跡だけでなく、広く全国の遺跡の発掘調査成果への応用も可能である。今研究による文

化財総覧 WebGIS の開発成果の意義は小さくないと考える。

(2) 平城京関係の史料について、『平城宮編年史料集成(稿)』に倣った体裁で綱文を立てて集成する『平城京編年資料集成(稿)』の編集を完了し、本書に収載して公表した。収録綱文は 562 件に及ぶ。

(4) 『平城京編年資料集成(稿)』の編集と合わせて、平城京の居住者に関する資料を集成して『平城京編年資料集成(稿)』に収録するとともに、主要データを一覧できるよう「平城京居住者一覧(稿)」を編集し、本書に収載して公表した。個人名が明らかになった平城京の住人は、左京 189 人、右京 335 人、不詳 4 人、計 526 人に及んだ（右京から左京への移貫者 2 人は各京でカウントされているため単純合計にはならない）。なお、増補を予定していた『平城宮編年史料集成(稿)』については、まとまった史料増補の必要がなかったため、報告書には収載していない。

B、平城宮・平城京出土木簡のグローバル資源化

(1) 海外機関との研究協力は、COVID-19 の感染拡大により困難を極めたが、韓国慶北大学の企画した国際シンポジウムにオンラインで参加し、「日本木簡の廃棄と再利用」と題する報告を行って、研究交流を深めることができた。

(2) 本基盤研究(A)の総合的研究成果については、WebGIS の研究開発に注力したため、シンポジウム開催や書籍刊行は実現できなかったが、研究分担者からも原稿をいただき、本報告書という簡易な形式ではあるが、その研究成果公開することができた。

（本項は研究実績報告書（C-7-1）として日本学術振興会に提出した内容に基づくものである。）